

## Uターンで故郷起こし



—農的社會デザイン研究所代表・蔦谷栄—



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社會デザイン研究所代表。

私の友人である永井考介さんがUターンした。永井さんは日本農業新聞の記者で、編集局長等をつとめられた。仕事ではもちろん、たくさんのご縁をいただいていたが、プライベートでもお互いに音楽が好きということもあって交流を続けてきた。私の還暦祝いのコンサートでは、バッハの曲をピアノで演奏していただいたこともある。もうずいぶんと前の話であるが、忘れられない思い出の一つが、永井さんが札幌支局に転勤になった折、「札幌ではいくらか時間に余裕が持てるだろうから、ピアノの練習に励みたい」と言って飛び立っていったが、その後に届いた転勤のあいさつ状を見ると、新住所は「ショパンハウス」なるマンションであり、意気込みのほどを大いに感じさせられたことがあった。その何年か後には確かに腕をあげて東京に戻ってこられた。

その永井さんの故郷は愛知県の西尾市吉良町。東海道線の蒲郡から名鉄に乗り換えて吉良吉田駅まで30分弱。吉良町は忠臣蔵の敵役とされた吉良上野介義央（よしひさ）公の領地であったところで、義央公は治水事業に取り組み、よく木曾馬に乗って巡視して回るなど「赤馬の名君」として地元では慕われてきた。その菩提寺である華蔵寺がある八幡山の滴るような緑、広がる田園では花卉（かき）や茶、野菜、水稻の生産が盛んであり、海も少し前まではノリの養殖もずいぶんと行われていたという。風光明媚（めいび）で、自然豊かであるだけでなく、歴史や文化にも富む。



きーずハウスで夜遅くまで談笑

この吉良町の町中で永井さんが始めたのが「きーずハウス」だ。ご両親が亡くなって残された家を改築し、ふすまを取り払い、天井等も張り替えて、大きなテーブルや椅子を入れ、いろいろな人が出入りして利用できるようにした。ここで学習塾や歴史を考える会をはじめとするさまざまな集まりを開くとともに、食事やお茶、アルコール類も提供している。詰め込めば20～30人は入れるスペースを活用して、さまざまな催し物ができるイベントホールの機能を持つ。あわせて料理の得意な近所の奥さんが中心になって腕

を振るうとともに、定期的にプロのすし職人も出入りし、時には永井さん自身も調理するなどして、飲食と休憩・交流の場としての機能を発揮している。ここで出される食材は基本的に地元産。野菜や卵、みそ・しょうゆ等の調味料はもちろんのこと、お茶やお酒、トマトジュースまで地元の逸品ばかり。そして退職金を注ぎ込んで購入したドイツのザウターのグランドピアノも置かれており、このピアノを弾くことができる貸しスタジオとしての機能も持たせている。まさにコミュニティー・カフェ、ソーシャル・ハウスとも言うべき役割を担いつつある。

「きーず」は、西尾市に吸収された旧幡豆（はず）郡3町である、吉良町の「き」、一色町の「一」、幡豆町の「ず」を組み合わせたもので、郷土に根差して、故郷起こしに取り組んでいく心意気を表しているという。立ち上げて半年。人の出入りは増えてはきているものの、まだまだだとか。経営的に楽ではないことは容易に察せられるが、筆者がおじゃました際にも幾人かの方々と交流することができた。これらの人たちとやりとりしている永井さんの顔は東京で見た顔とは一味も二味も違って見えた。地域の“バール”そして“サロン”として持続・発展していくことを期待したい。